

アントクメ海中林の復活を目指して

コンブの仲間の海藻で、サザエ、アワビの餌として重要なアントクメの伊豆大島における1年間の生活史を明らかにした。今回の調査で得られたデータをもとに、遊走子（孢子）放出が盛んになる夏場にアントクメの消失した海域に母藻を投入し、アントクメ海中林の復活を試みた。

実施機関

大島分場

事業名

生産力回復研究

背景・ねらい

アントクメ（写真1）は、伊豆諸島に分布する唯一のコンブ科海藻で、貝類の餌やイセエビ、魚類等の幼稚仔の棲み家として重要な役割を果たしている。伊豆大島では1998年以降、島南部の波浮港地区を除き生育が確認できなくなり、その影響が懸念されている。そこで、大島分場ではアントクメ藻場修復に必要な生長および成熟に関する調査に取り組んだ。

成果の内容・特徴

伊豆大島におけるアントクメ孢子体の生長が明らかになった（図1）。1月下旬に出現した葉長2.4cmの幼芽は、6月中旬には63.3cmと最大になり、その後、先枯れにより葉長は短縮し、10月には流出した。

子嚢斑は7月中旬から9月下旬にかけて認められ、7月下旬から9月下旬にかけて遊走子の放出が確認された（図2）。

本結果をもとに、8月下旬にアントクメ海中林が消失した海域への母藻投入を行った（写真2）結果、翌年1月の調査で孢子体幼芽を確認し、母藻投入の効果が認められた。

本調査および昨年行った配偶体の培養結果から、伊豆大島におけるアントクメの生活史が明らかになった（図3）。1月に出現した孢子体は6月に最大の葉長となる。7月下旬から孢子体が流出するまで遊走子は放出され、配偶体となる。水温の低下につれて配偶体は生長し、12月頃、雄の配偶体に精子が、雌の配偶体に卵ができ受精する。受精卵から芽を出した孢子体は、1月頃肉眼で確認できる葉長となり、初夏にかけて生長していく。

成果の活用と反映

本調査により明らかとなったアントクメの生活史等に関する生物学的知見は、アントクメ藻場回復に向けた藻場造成等を効果的に行う上で、貴重な科学的データとなる。

（駒沢 一郎）